

4章 まとめ —三校の実践から得られる示唆—

陸奥田 維彦(連合教職実践研究科)

第2部では、大阪教育大学附属天王寺中学校(以下天王寺中)、附属天王寺小学校(以下天王寺小)、附属池田小学校(以下池田小)の3校におけるカリキュラム・マネジメントの実践を紹介し、研究者が各校の「実践の評価・解説」を行った。学校によって解決したい課題は異なるため、カリキュラム・マネジメントは一律の正解はなく、学校ごとに様々な方策がある。しかしながら、各校の実態・課題に即したカリキュラム・マネジメントの取り組みから、自校のカリキュラム・マネジメント推進や課題解決への示唆となる要因等と出会うことがある。第2部のはじめに:実践のみどころで示した実践事例を読み解く5つの視点は以下の通りであった。

- ①各学校が編成した教育課程に基づき教育活動の質の向上を図ること
- ②全教職員で組織的に学校教育目標の実現を目指すこと
- ③教科横断的な視点で教育目標達成に必要な教育内容を組織的に配列していくこと
- ④教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図るPDCAサイクルを確立すること
- ⑤教育課程実施に必要な人的・物的な資源を活用する体制を確保すること

5つの視点に即して3校の実践

まずは、簡単に5つの視点に即して、視点②より5つの視点についての3校の実践を振り返ることとする。

視点②全教職員で組織的に学校教育目標の実現を目指すこと

3校ともに、全教職員が組織的にカリキュラム・マネジメントに取り組んでいた。特に天王寺小では、年間計画の試案作成時に「教育課程は、教務主任や管理職の範疇」と捉えられがちだった状況を「教職員ひとりひとりが学校全体の教育活動に関しての主体者となる」ように校内研究組織の再編を行った。そして、全ての教職員がカリキュラム・マネジメントの必要性を理解しているからこそ、3校ともに学校教育目標の実現へと向かうことができたのである。天王寺中では、スクールポリシーを策定し「育てたい生徒像」をかかげている。天王寺小では、「学び上手な子ども(知的な初心

者)」等を設定し、池田小では、「安全科」において、どのような子どもの姿を実現したいのか、資質・能力を身につけさせたいのかを明確に示している。各校、カリキュラム開発においてめざす資質・能力を学校教育目標具現化のステップとしてつなぐ役割を担っていた。

視点③教科横断的な視点で教育目標達成に必要な教育内容を組織的に配列していくこと

天王寺小では「STEAM 教育」、天王寺中では「自由研究」、池田小では「安全科」と、教科等横断的な視点で教育内容を組織的に配列している。「STEAM 教育」では、コンセプトシートを用いて、関連させた教科とその内容を端的にまとめた。「自由研究」では、教科等で培われた資質・能力をフル稼働して探究的な学習に取り組んでいる。「安全科」では、各教科・領域における安全にかかわる内容を取り入れ、安全教育のカリキュラムを立案している。

視点④教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図るPDCAサイクルを確立すること

年度を超える長期的なスパンでのマネジメントサイクルによるカリキュラムの見直しについて参考となる実践が天王寺中である。70 年以上の長期にわたって継続して実施してきた「自由研究」は、平成 30 年度まで生徒たちは、各学年でテーマを設定し、3 年間で 3 回の研究のサイクルを経験することができた。しかし生徒間の研究の質に差が見られ、成功体験を得られた生徒が限定的であったり、優秀な研究を行った生徒のみが論文として執筆したりといった課題がみられた。これらは様々な角度から旧カリキュラムを評価したため明らかになり改善を行っている。結果、3 年間かけて 1 つの研究を深める長期的な自由研究にシフトし、その集大成として、全員が自身の研究を論文執筆できることとなった。

池田小は、暴漢が侵入した事件後、平成 16 年以降、総合的な学習の時間において、安全教育を一つの柱として学習に取り組んだ。児童は、危機回避能力と安全スキルを身に着ける防犯に視点を置いた安全教育と、「生命尊重」と「思いやり」の視点を重視した道徳科・生活科及び総合的な学習の時間を中心とした生命尊重に関わる教育を学んだ。平成 21 年度教育課程特例校の指定を受け、それ以後教育課程に「安全科」を正式に位置付けた。しかし、各教科・領域には、安全教育の内容が含まれているため各学年、年間 35 時間安全科を実施すると重複が多くなり、教職員、児童ともに負担感があつた。平成 27 年度からカリキュラムの見直しを図り、年間 15～16 時間程度の授業に厳選し、スリム化を図った。その後、令和 2 年度には安全教育のカリキュラムを実践、検証を行い、令和 3 年度は、安全教育のカリキュラムの授業案、学校安全の手引き、不審者対応訓練の動画などをまとめた「学校安全 Home Page」を立ち上げるにいたった。

天王寺小は、「STEAM 教育」における教科等の横断的な教育実施に際し、「教科」を新設するのではなく、これまで実践してきた各教科での学びを他教科へ広げていくなから、具体的な授業を考えていくことをめざした点に注目ができる。

マネジメントサイクルの確立に、カリキュラム評価を工夫したのが天王寺中である。教職員による評価とともに、生徒が長期にわたる探究を実践することを通して何を学びとして認識し、あるいは困難を抱いていたのか等について生徒の自己評価の実態を評価材料としたところは特徴的である。

視点⑤教育課程実施に必要な人的・物的な資源を活用する体制を確保すること

天王寺小は、保護者との連携を探り、児童だけでなく、教職員・保護者の中に「自分たちでつくっていく学校」という帰属意識と愛校心を高めた。天王寺中は、自由研究を推進する中で、より専門的な指導が必要な場合は、大学教員等に指導を依頼する。今後は保護者との活用を検討中とのことである。

また、カリキュラム評価において研究者を招聘し、生徒への質的研究によるカリキュラム評価を試みた。自由研究実践の成果と課題、それに対する提言を研究者がまとめた。例えば 2 割近くの低満足度群に属する生徒への支援方略が必要であり、その支援策として成果の可視化を提案している。研究者も様々な角度からみており一律ではない。異なる視点からの評価が信頼性を高める。そして評価を核としたマネジメントサイクルは、改善のみならず、今後よりいい形で取り組みを継承していくことが可能となる。

視点①各学校が編成した教育課程に基づき教育活動の質の向上を図ること

上述の視点②～⑤により、3 校ともに、短期・長期のマネジメントサイクルの循環により、課題を克服し、確実に教育活動の質の向上を図ったといえるのではないだろうか。天王寺小の個業的な教科研究は、協働的な教科等横断的な「STEAM教育」のカリキュラム開発へと向かい、研究スタイルの一新等改革を実行した。天王寺中の「自由研究」は、研究としての質に差が見られ、自分が行った研究という意味では成功体験を得られた生徒は限定的であった。カリキュラムを評価し、改善点を見出した結果、全学年の生徒がゼミに配属する形となり、学年や学級担任に加え、ゼミ教員から専門的な指導を受けられることとなった。池田小の安全科において、重複することもあった安全科の内容と時間の精選を通して、「防犯」「交通」「災害」「生活」の視点ごとに内容を整理し、他教

科との関連性を持たせたり, 学校行事との関連性を持たせたりすることで, 質の高い安全科の授業をデザインすることとなった。このように最大に学習効果をあげようとするのが, カリキュラム・マネジメントの目的であり, PDCA サイクル循環で絶え間なく教育の質の向上を目指していた。

共通して見えてくるカリキュラム・マネジメントが有効に働く要因

カリキュラム・マネジメントに関する3校の実践から, どのような要因が学校運営における活用の可能性を示しているのだろうか。検証したい。

カリキュラムのマネジメントサイクルの確立と条件環境整備を一体的にとらえる

カリキュラム・マネジメントに組織的, 計画的に取り組んでいくために, 附属 3 校はいかに取り組んだのだろうか。一般にカリキュラム・マネジメントという言葉が浸透しつつあるものの, 学校現場では, 教育課程の評価, 改善に終始している傾向が散見される。附属 3 校では, 同時に経営活動に注視し, 教育課程の見直しと一体的に条件整備を行うことが, 非常に重要な要因であることが示されている。教育課程のマネジメントサイクルを循環させるのも, 多様化, 複雑化した諸課題の解決に向かうのも, 学校組織であり, 学校文化なのである。

天王寺小は, STEAM 教育が実施しやすい環境整備を重視し, 働き方改革を実行している点に注目したい。教科等横断的な視点が広がりを見せる中, 伝統的な教科教育における個人的な研究体制に課題を認識し, 組織的な研究へと舵を取るため, 個業から協働へと学校文化の醸成へと着手したのである。職員室内の協働ワークスペースづくりにはじまり, 教材・教具の整理等を教職員自らが主体的に環境整備に努める。職員室という空間は重要な環境の1つなのである。自分たちの手で行い予算を最小限に抑えたのは, 「iPad 購入」等子どもたちの学習環境整備へと向かう。リソースマネジメントの成果である。これらの取り組みがすでに教職員の協働性を高め, 「子どもたちによりよい学びの場を」「私たちが働きやすい場を」という学校文化へと影響を与えた。また, 業務改善の視点において, 研究授業の本数を減らして時間を確保したり, 校時表を工夫したり, 養護教諭と栄養教諭も「実践教育部」の部員として位置づけ全教職員でカリキュラム・マネジメントを推進する体制を整えたり等, 働き方改革に取り組み学校文化へと影響を与えた。このように, 組織構造の改革を学校文化の醸成につなげ, カリキュラムのマネジメントサイクルの確立と STEAM 教育を推進することができる条件環境整備を一体的にとらえたところに特徴がある。

天王寺中は、校務分掌組織を変革し、各学年主任が担当学年の自由研究係となることで、3年間という長期の自由研究活動における学習状況を把握、評価できるしくみを整え、次年度への改善へつなげることを可能としている。また、学級担任による指導を主としていた旧カリキュラムから、全教員によるゼミ形式へと指導体制を修正した。そして ICT 環境を活用し、教員と生徒の連絡や課題のやり取り等効率化を図った。自由研究に取り組みやすいマネジメントサイクルの確立とともに環境整備に着手した。

池田小は、安全科の研究は、研究部や道徳担当が、自身の役割にプラスして研究推進役を担っていた。そこで安全科を研究教科とする教員を配置することで、その重複が避けられ、安全教育の推進が加速された。

「カリキュラム・マネジメントを行うと、教員の負担が増えるのではないか」という懸念があるとするならば、カリキュラム・マネジメントを推進するために組織構造や学校文化等の環境整備を重視することは、教員の働き方を見直すこととなり、教員の負担が軽減されることにつながる。よってカリキュラムのマネジメントサイクルが循環され、最大限の教育効果が得られることが期待されるのである。

「学校教育目標」と「授業」をつなぐ

3校ともに、「STEAM 教育」「自由研究」「安全科」におけるめざす子どもの姿を意識し、その先には学校教育目標の実現を目指していたが、その際に留意すべきは何だろうか。学校教育目標が有名無実では実現は不可能であることは言うまでもない。日常的までないにせよ、教職員一人一人が取り組む教育活動において、学校教育目標を意識できているだろうか。全ての教職員がカリキュラム・マネジメントの必要性を理解しているならば、教育活動の最小単位である授業や単元において育成すべき資質・能力と、学校教育目標の具現化により育まれる資質・能力との関連を明確にしながら日々取り組むことが効果的である。つまり、学校教育目標の実現を意識して、児童・生徒に確実に資質・能力を育む授業の実現が大切なのである。「主体的・対話的で深い学び」による授業改善とカリキュラム・マネジメントを一体化させ、「授業」と「教育課程」をつなぎ、グランドデザインにより「学校教育目標」と「教育課程」をつなぐのである。

学校教育目標が実現されたかどうかを評価検証するためには、教育目標を、資質・能力ベースで設定、見直したり、達成可能な具体的な重点目標を設定したりする工夫が必要となってくる。同時

に、学習評価や授業評価を教育活動の根幹として教育課程の実施状況を評価して改善していくことも求められる。

生活科・総合的な学習（探究）の時間を中核においた教科等横断的な学習の留意点

3校の実践「STEAM 教育」「自由研究」「安全科」は、生活科・総合的な学習の時間を中核として、各教科等との関わりを意識しながら単元を構成している。その際、総合的な学習（探究）の時間では、学校、児童生徒の実態や地域の特性を考慮した目標を定めると同時に、各教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、教科等間の関係を十分に考慮し、教育内容を位置付け単元を構想することが重要である。各教科等で身に付けた資質・能力を、生活科・総合的な学習（探究）の時間において実際の生活と密接に関連した現実課題を解決する学習の中で活用・発揮して探究活動を充実させていくことが期待される。つまり各教科で育てる資質・能力と、総合的な学習（探究）の時間で育てる資質・能力を往還させながら、学校教育目標に示された資質・能力と直接的につながるのである。

生活科や総合的な学習（探究）の時間と各教科等との関連を視覚化する手段の一つに、小学校ではなじみが深い単元配列表がある。各教科、領域等の1学年の1年間の単元計画を記載した表である。年度当初、計画カリキュラムとして位置づけ、定期的に評価・改善し、年度末には、実施した修正カリキュラムが完成する。この修正した単元配列表を、次年度の同学年に引き継ぎ、参考として新たな計画カリキュラムが作成される。この表の利点は、生活科や総合的な学習（探究）の時間と教科等、そして教科等間の関連づけが容易であり、学習内容のみならず、資質・能力についてもつながりを組織化できることが期待される。実践して評価・改善することで、生活科や総合的な学習（探究）の時間と教科等が相互に補完し合い、学びが深まり、児童・生徒の確実な資質・能力向上へと結びつけることが重要である。しかしながら、単元配列表作成がカリキュラム・マネジメントであるととらえることがないよう、あくまでも手段の一つであることを十分に留意する必要がある。

短期と長期の二つのマネジメントサイクルによりカリキュラムを改善する

3校ともに、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図るPDCAサイクルを確立する際に、年度を超える長期的なスパンでのマネジメントサイクルによるカリキュラムの見直しを実施していた。カリキュラム・マネジメントでは、授業、単元等における内容、方法、時期、指導体制、育みたい資質・能力の到達度等の実施状況等の評価結果に対応した改善等、小さなサイクルでの蓄積も必要である。評価規準等を設定し、どう子どもの姿を見とるのか、その力量が問われる。天王寺小は、職員室

に常掲された年間カリキュラムに随時書き込みをする等、常に意識できるような環境にしていることは大いに参考にしたい。学期、中間、学期、年間等のサイクル、そして年度を超えた大きなスパンの持続的なマネジメントサイクル、これら短期と長期の二つのマネジメントサイクルをうまく組み合わせ循環させることが効果的である。その時に、常に主語を「児童は」「生徒は」において、子どもの実態から評価の議論をしたいところである。天王寺中は、自由研究が生徒のいかなる学びにつながっているのかを、生徒への自由研究の満足度アンケート調査と一部生徒へのインタビュー調査より実践の評価をしている。どのような教育活動も、具体的な「子どもの姿」が活動のねらいに対して効果的だったかどうかの手応えを示唆する。「子どもの学び」を拠り所にして検証し、教育課程を客観的に評価することを心掛けたい。

地域と連携した授業の編成から社会に開かれた教育課程の実現へ

天王寺小では、「STEAM 週間」という参観の機会を設けたり、ホームページを有効活用することで、子どもの学ぶ姿を保護者と共有できるシステムを構築している。天王寺中では、大学教員などに指導を依頼することもある。池田小では、警察との連携において安全教育を推進している。

学習指導要領の理念に「社会に開かれた教育課程の実現」がある。その実現のために3つの柱からなる資質・能力を育むことをめざし、その具体的な方策が「アクティブ・ラーニング」とともに「カリキュラム・マネジメント」なのである。学習指導要領総則には、「教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。」と説明されている。学校と地域が協働で子どもたちに必要な資質・能力は何かを明らかにし、地域と連携した教育活動を充実させ、評価も共有する事例がある。今後どのように家庭、地域との連携・協働を図っていくのか。マネジメントサイクルを支える環境整備の1つとして、期待される要因の1つである。

カリキュラム・マネジメントには、こうすればいいという定型化された手法はなく、各学校の実態によって様々な手立てを考え、カリキュラム・マネジメントを推進していくこととなる。3校のカリキュラム・マネジメントの実践事例から、カリキュラム・マネジメント充実に向けて、実践をサポートするための諸要因について整理したが、公立学校等におけるカリキュラム・マネジメント取り組みへの道筋を提示できていれば幸いである。